

山へ帰ったやまがら

小川未明

青空文庫

ひで
 英ちゃんひでの飼かっているやまがらは、それは、よく馴なれて、かご
 から出でると指ゆび先さきにとまったり、頭あたまの上うへにとまったり、また、耳みみ
 にとまったりするので、みんなからかわいがられていました。

はじめのうちは、外そとへ飛とび出だすと、もうかごへはもどってこな
 いものと思おもって、障しょう子じを閉しめて、へやの中なかで遊あそばしたものです。
 しかし、長ながいうちにいつしかここが、自じ分ぶんのすみかと思おもってしま
 ったので、すこしばかり遊あそぶと、またかごの中なかへ入はいってしまいま
 した。そして、ここがいちばん安あん心しんだというふうに、頭あたまをか
 して、いままでさわいで疲つかれたからだを、じつとして休やすめるので
 ありました。

「こんないい鳥はめつたにないよ。」と、英ちゃんひでは、平常ふだんから自慢じまんしていました。

「どの鳥とりだつて馴なれれば同じおなじさ。しかし子飼こがいいでないと、なかなかこんなにならぬそうだね。」と、兄にいさんがいました。

お正しょうがつ月ひのある日ひのことでした。空そらにはたこのうなり音おとがしていました。英ひでちゃんは、やまがらに餌えをやつてから、わざとかごの口くちを閉しめずにおきましたけれど、やまがらは、外そとへ出でようとしません。そのとき兄にいさんは口笛くちぶえを吹ふいて、指ゆびを出だして見みせました。するとやまがらは、ついと飛とんできて指ゆびに止とまりました。「障しょうじ子じをしめておかなくていい？」と、英ひでちゃんが、ききました。

「だいじょうぶだろう。外そとが、怖こわいんだから。」と、兄にいさんが答こたえました。

「空そらを見ているんだね。」

「さあ、もうかごへおはいり。」と、兄にいさんは、やまがらに向むかって、指ゆびを動うごかして見みせました。

ちようど、裏うら庭にわの桜さくらの木きにすずめが止とまって鳴ないていました。やまがらは、その声こえにでも誘さそわれたのか、ふいに窓まどから、家いえの外そとへ飛とび出だしてしまいました。

「あつ、逃にげた……。。」と、英ひでちゃんは、あわてました。

「いま、もどるよ。」と、兄にいさんは、しきりに口くちぶえ笛ふえを鳴ならしながら、やまがらの行ゆくえ方まもを見守もると、どうして、そんなに羽はねがよく

きくのかと思おもわれるほど、一き気に飛とんで、やまがらは、隣となりの屋根やねを越こしてしまいました。

「英ひでちゃん、はやくいってごらんよ。あつちの林はやしほうの方へいったよ
うだ。」

兄にいさんは、自分じぶんもかごを持もって、後あとから追おいかけていきました。

ある大おおきな屋敷やしきのまわりは、雑木ぞうきの林はやしになっていました。ここ

には、すずめがたくさん枝えだに止とまって、ふくらんでいます。その

お仲間なかまい入りでもしたように、やまがらが枝えだから枝えだをおもしろそう

に伝つたっていました。

「あつ、あそここにいた。」

英ひでちゃんは細こまかな枝えだをとおして上うえを仰あおぎました。

「英ちゃん、いた？」

兄さんは、かごを木の下に置いて、口笛を吹きました。けれど、やまがらは、きこえないふうをしています。英ちゃんは、はるか上のやまがらの方に向かって、できるだけ高く手を上げて、小さな指を出して見せました。しかし、やまがらは、もうそんなものには見向きもしませんでした。ただ、いままで知らなかった大きな自然の中で、なにを見ても珍しいので、忙しそうに動いて、すこしもじつとしていませんでした。

「兄さん、もう帰ろうよ。」と、英ちゃんが、悲しそうにいいました。

「晩になったら、帰るかもしれない。」と、兄さんは、まだやま

がらの帰るのを信じているようでした。

「もう帰ってこないよ。お家がわからないもの。」

英ちゃんは、いくつもたこの上がっている、原の方をながめて、自分たちは、二度とあのやまがらを見ることがないだろうと思ひました。

家へ帰って、かごの口を開けたまま、かごを軒下の柱にかけました。先刻まで、その中には、ほおの白い、胸毛のくり色をした、かわいいやまがらがいたのにと考えると、あんなに馴れながら逃げたことが、夢としか思えません。

「すずめが鳴いていたので、お仲間入りがしたくなっただね。」と、英ちゃんが、いいました。

「きつと、そうだろう、忘れていた山奥の林や、父鳥や、母鳥のことを思い出したのだよ。」と、兄さんが、いいました。

兄さんも、いつしか、やまがらは帰つてこないと思つたのでした。その晩には、寒い木枯らしが吹きすさびました。翌日起きてみると、屋根も、圃も、木のこずえも、霜で真つ白でありました。あらしの中で、はじめの夜を過ぎしたやまがらは、どうしたであらうと、兄弟は、心配しました。

「すずめたちと同じ木に止まって、小さくなつて、寝たかしらん。」

「すずめは、やさしい鳥だから、意地悪なんかしないよ。」

「そうだ、僕、鳥屋のおじさんに、きいてみよう。」と、英ちや

んが、いいました。

いつも、学校がっこうの帰りかえに、鳥屋とりやの前まえに立たつて、いろいろの鳥とりを
見みるので、よく顔かおを知しっているおじさんに、きいてみようと思おもつ
たのでした。

あくる日ひ、やまがらのことを心しん配ぱいしながら、学校がっこうの帰りかえに、
その店みせの前まえまでくると、ちようどおじさんは、日ひ当あたりの入いり口ぐち
で、鶏にわとりの小屋こやをそうじしていました。そして、英ひでちゃんでが、やま
がらの逃にげた話はなしをして、どうしたろうときくと、おじさんは、ほ
うきを動うごかしながら、

「やまがらも、昨夜ゆうべは、坊ぼつちゃんたちのここを思おもい出だしたでしよ
う。けれど、今日きょうは、もうどこか遠とおい山やまの方ほうへ飛とんでいつて、か

ごを思^{おも}つても身^みぶるいしていますから、二度と人^{にん}間^{げん}の手^てにはつかまりませんよ。」といいました。

その日^ひから、英^{ひで}ちゃんは、原^{はら}っぱへ行って、朗^{ほが}らかにたこを上^あげて遊^{あそ}びました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「愛育 7巻1号」

1941（昭和16）年1月

※表題は底本では、「山《やま》へ帰《かえ》ったやまがら」となっています。

※初出時の表題は「山へ帰つた山雀」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山へ帰ったやまがら

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>